

プロローグ

## 「シンポジウムの意図するもの」 ～つながりの大切さ～

東京大学名誉教授  
花王芸術・科学財団評議員

原島 博



### ヒトとチンパンジーはどこが違うか？

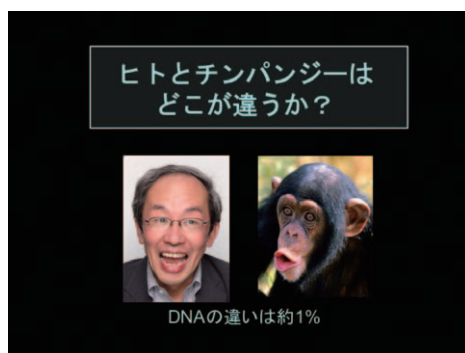
ご紹介いただきました原島です。今回のシンポジウムのイントロダクションとして、問題提起をさせていただきます。我々はヒト、ホモサピエンスですが、ヒトというのはつながりを求める動物です、その話から入らせていただきたいと思います。

ヒトとチンパンジーを比べたときに、どこが違うのでしょうか。たとえば、この2つの顔を見たときに、何が違うのでしょうか。DNAは、1%ぐらいしか違っていません。99%は共通です。僕は、その1%の違いが重要だと思っております。では、その1%の違いは、どこからどのようにして生まれたのでしょうか。

チンパンジーのほとんどは、動物園でなければ、アフリカの熱帯雨林で暮らしています。我々ヒトの祖先も、そこに暮らしていました。そこはすばらしい場所で、樹の上に手を伸ばせば、おいしい木の実がたっぷりあります。猛獣が襲ってくるかもしれませんが、樹の上に逃げれば安全です。そのような楽園で暮らしていました。

ところが我々の祖先は、よせばいいのに、森林から外へ出てしまったのです。もし、森林の中にそのままいれば、非常に幸せな生活をしていたかもしれないのに、外へ飛び出してしまいました。ちょうどその頃、アフリカ東側にプレートテクトニクスが沈み込む場所があって、そこが草原地帯になりました。その草原地帯、つまりサバンナに、直立歩行を始めたヒトは、飛び出してしまったのです。ところがそこは、とんでもなく過酷な環境でした。

どう過酷だったかといいますと、サバンナではライオンやヒョウなどの猛獣が襲ってきたときに逃げる場所がありません。すぐ近くに食べるものもありません。遠くまで取り



に行かなければならない。でも、赤ちゃんがいる女性は、遠くまで行くことはできません。男性が代わりに取りにいかねばならない。そういうことになりました。では、こういう厳しい所で、なぜヒトは生き延びることができたのでしょうか。

### ヒトは共同生活を武器とした

結論は、こういうことだろうと思います。ヒトは、共同生活をするを武器としました。猛獣に襲われたとき、一人では対抗できないけれど、みんなで一緒に対抗すれば、なんとかやっけていけます。要するに、敵に襲われないように、団結して、共同生活を営むことを武器としたということです。

さらに、食べるものを遠くへ取りに行く場合も、それぞれが自分で食べるものを一人で行くのは、効率的ではありません。共同で取りにいて、取った食べ物を分配する。その方がはるかに効率的です。分配するというのは、動物の一部にはありますが、あまりないことです。ヒトは、分配するというのを積極的に始めました。

ヒトは、自然の中で互いに助け合って生きる動物です。一人では生きられない動物です。我々は、一人になると寂しくなります。それは、もともとのヒトの遺伝子に書き込まれていることだろうと、僕は思っています。

さらにヒトは、道具と火の使用を覚えました。それは、ある程度、脳が大きくなったこともあるでしょう。直立歩行することによって、脳が大きくなって安定に支えられるようになりました。また、共同生活をしていると、心の葛藤がいろいろとありますよね。その心の葛藤が、脳を大きくしたともいわれています。

脳が大きくなったヒトは、道具と火の使用を覚えて、生き延びるために、さまざまな創意工夫を始めました。しかも、自分が生き延びるためだけでなく、子孫につなげるということをしました。それが、文化となりました。

ヒトは、文化を伝えながら  
文化に囲まれて  
生きる動物である。

文化なしには生きられない。

ヒトは生物学的な遺伝子だけでなく、  
文化の遺伝子(ミーム)を、子孫に  
伝えている。

僕は、「ヒトは、文化に囲まれて生きる動物である」と言っています。我々は、先祖が創意工夫をして伝えてきた文化なしには、今を生きることはできません。我々は、先祖の恩恵にあずかって生きているのです。

文化の遺伝子は「ミーム」とも言われています。ヒトは、突然変異と自然淘汰だけではなく、ミームを子孫に伝えて、

文化を蓄積することによって進化しています。「人は自然の中で、互いに助け合って、文化を伝承しながら生きる動物である」。これが、チンパンジーとヒトとの1%の違いです。これが大きかったと、僕は思っています。

また、チンパンジーは、子どもを産めなくなると死んでいきます。老人の期間がほとんどありません。でもヒトは、子どもを産めなくなっても長生きをします。それはなぜでしょうか。おばあさんについては、若い母親の育児を助けるためという有力な説があります。ヒトは1年で離乳をしますが、サルやチンパンジーは5年から7年、乳を与え続けます。ヒトは1年で離乳をして、年子を産めます。最初の赤子がまだ成長していないのに、次の子を産んでしまうのです。それは、おばあさんが育児を助けてくれるから可能になったという仮説を人類学者のホークスが出しています。「おばあさん仮説」として知られています。

サルやチンパンジーは、一人で赤ちゃんを育てます。ところがヒトは、一人ではなくて、おばあさんに助けてもらいながら育児をする。要するに、助け合うことにより、人類は生き延びてきて、おばあさんにも長生きする役割ができたのです。おじいさんの長生きについての有力な説は知りませんが、おそらく文化の伝承という意味で、おじいさんは非常に重要な役割を果たしているのだと思っています。おじいさんがいるから、孫に文化を伝え、文化が伝承される。おじいさんにもそのような役割があるから、長生きをしているのだらうと思います。

## 人は「つながり」の形を変えてしまった

これまで述べたように、「人は自然・人・文化のつながりの中で生きる動物」です。ところが近代になって、人は、「自然とのつながり、人とのつながり、文化とのつながり」の形をみずから変質させてしまったように見えます。

近代になって、人は自然よりも自分を上位に置くようになりました。自然の中であって自分が生かされているのではなくて、自分がまずあって、自然はいわば、人のためにあるもの。そのように思うようになりました。

中世までは、自然は神が創り給いしものですから、与えられたもの、価値あるものとして、人はそこで生かされているという考え方だったと思います。ところが近代になって、自然は征服の対象になりました。自然の中に人が生かされているのではなくて、自然は人のためにあるもの。ということは、人のために自然を改造してもいいという考え方になってきたのです。

結果として、人は自然を自分たちが暮らしやすいように変えていきました。改造してい

きました。そして、人は自然ではなく、自然から隔離された人工的な都市空間に棲息するようになりました。特に産業革命以降、それが顕著になりました。都市への人口流入と集中が起きました。

日本は、戦後になって、これが急に進展しました。工業化が都市集中を加速し、農村が過疎化しました。ブラックジョークで申し訳ないのですが、「そのうち、日本に過疎地はなくなるだろう」と言われています。過疎地に住まわれている高齢者の方がそのうちに亡くなると、もはや過疎地は過疎ではなくて、文字通り無人地帯になります。

さらに、都市に居住するようになった人は、管理された空間でしか生存できない存在となりました。これを自己家畜化という言い方をすることもあります。要するに、自然の中で生きることができなくなって、家畜のように管理された存在になったのです。

## いまは金銭によるアウトソーシングの時代

その都市では、必ずしも互いに助け合わなくても、生活できるようになりました。コンビニへ行けば、お金さえ持っていれば、何でも手に入ります。自分で食物を生産する必要がありません。お金さえあれば、塾に子どもを行かせることにより、自分で子どもを教育しなくても、アウトソーシングができます。

互いに助け合うことも、行政に税金を払うという形で、金銭でアウトソーシングするようになりました。安全ですら、自分でやらずに、行政にアウトソーシングする時代です。

子育てでも、おそらくはサバンナにいた頃から、人は家族あるいは隣近所がサポートしてきました。子育ては共同ですることが大前提だったのです。それが今、自分たちで助け合うのではなくて、「税金払っているのだから、保育所つくりなさい」と行政に依存することが多くなって、隣近所で助け合うことは、後回しになってしまっています。

文化についても、世代を超えた伝承がなくなりました。特に日本では、戦争を境になくなってしまったような気がします。戦争の前までは、おじいさんやおばあさんの言うことは大事だとして尊重するという価値観があったと思います。ところが、戦争によって、老人たちは、自分たちに自信をなくしてしまいました。語らなくなりました。そして若い人たちは、老人たちが言うことを「古い」と言って、聞かなくなってしまいました。世代間の交流がなくなってしまったのです。

さらに言えば、かつては大家族で、おじいさんやおばあさんも一緒に住んでいましたが、今、それがほとんどなくなってしまいました。世代間の交流をする場や機会もなくなってしまったのです。

## 本当にこれでいいのか？

以上ここでは、「ヒトとチンパンジーはどこが違うか？」をヒントに、問題提起をさせていただきました。人は自然の中で共同生活をして互いに助け合い、そして文化の伝承をする、それがチンパンジーとの大きな違いです。人は、数十万年あるいは数百万年の間、自然・人・文化のつながりの中で生きてきました。しかし、それによって生き延びてきたはずなのに、わずかここ数十年、百年ぐらいの単位で、それを自ら変えてしまいました。これで本当にいいのでしょうか。これからどうすればいいのでしょうか。それを今日は、一緒に考えてみたいと思います。

このあと、内藤先生から「つながりを生かす街づくり～建築からみた人と文化のつながり～」というテーマで、基調講演をいただきます。続いて、パネルトークの前のミニレクチャーとして、牧先生からは「地域資源と“心産業”～過疎を自然と人のつながりで再生～」、織作先生からは「風景と共存する暮らし～写真を通じてみた自然と文化のつながり～」というテーマで、講演をお願いしてあります。短い時間ですが、おつきあいいただければと思っています。ありがとうございました。

原島 博(東京大学名誉教授 花王芸術・科学財団評議員)

1945年終戦の年に東京で生まれる。2009年3月に東京大学を定年退職。東京大学では、工学部および大学院情報学環に属して、人と人とのコミュニケーションを、リアルとバーチャルの両側面から技術的にサポートすることに関心を持ってきた。その一つとして、人の顔にも興味を持ち、1995年に「日本顔学会」を発起人代表として設立、「顔学」の構築と体系化に尽力してきた。科学と文化・芸術の融合にも関心を持ち、文化庁メディア芸術祭審査委員長・アート部門審査員、グッドデザイン賞(Gマーク)審査員などもつとめた。現在は東京大学名誉教授、あわせて女子美術大学(美術系)、明治大学(総合数理)、立命館大学(人文系)の客員教授でもある。公益財団法人花王芸術・科学財団 評議員。

もともと人は、数十万年の間、  
自然・人・文化のつながりの中で  
生きてきたはずなのに……

ここ、数十年～百年で大きく  
変わってしまった。

これでいいのか？  
これからどうすればいいのか？